

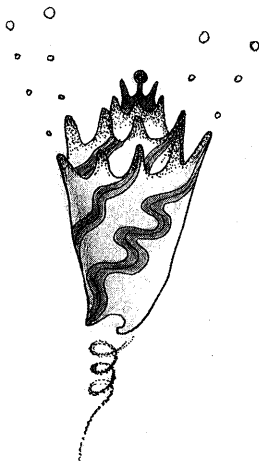
一人ひとりの子どもの心の流れに添った「子どもの時間」といったものに尺度を合わせて幼児教育の現場を眺めてみると、登降園時間に始まって、保育日数、年齢ごとのクラス分け、入園時期、卒園時期と「大人の時間」が大きな顔をしている現実気付く。これらの「時間」について、もう一度見直してみる時がそろそろきているように思う。それと同時に、私達自身も心の中に細々と生きているはずの

「子どもの時間」を呼び戻すことが、他者と時を共有しようとする時に、相手が大人であれ子どもであれ、どうしても必要であるような気がしてならない。
（お茶の水女子大学附属幼稚園）

注1 仁科弥生著「エリクソンと幼児教育」一九八一年六月号より一九八三年十月号まで「幼児の教育」に掲載

クリステヴァ、 『女の時間』を読む

浅井美智子



クリステヴァの『女の時間』（棚沢直子・天野千穂子編訳）は、一九七四年から八四年までの「女の

時間」を含む十のインタビューと論稿から編まれている。勿論、クリステヴァのすべての論稿を収録し

たものではないので、ここから彼女の思想の全体を把握することは難しい。しかるに、タイトルが示すように、これはクリステヴァ理論とフェミニズム思想との交錯点を解きほぐそうという意図のもとに、ひとつのまとまりをもったテキストとなっており、クリステヴァ理論が女性解放理論としていかに読めるかという問題にコンパクトに応えているといえるだろう。したがって、ここでは、紙数の都合上、「女の時間」を中心にクリステヴァ思想の一断片を「女性解放」という視点から読んでみたい。

クリステヴァ思想の中心的テーマは、なんといっても西欧の男根中心主義的主体の脱構築にある。その理論的前提として、彼女は西欧思想が築き上げた直線の時間に支えられた男性的主体概念、あるいはフロイトが定式化したエディプス三角形にみられる硬直化した主体形成概念を批判し、「流動的主体」概念を提示した。「流動的主体」とは、西欧思想が絶対視してきた「AはBである」という自己同一的

な主体概念に対して、「Aは〜でない」という否定、他者性を導入した概念である。彼女の言に従えば、母と幼児の融合状態（ラカンの鏡像段階、フロイトのエディプス期以前）から幼児が分離していく過程は、語りながら、言語の中の言語でないもの（リズム、抑揚、音、幼児の舌語りなど意味をなさないもの）を噴出させ、主体の自己同一性を破壊しつつ、再編成し、今ある社会性に働きかけ更新、拡大していく「今語りつつある主体」である。その契機となるのが内部に抱え込んだ全能としての「母なるもの」の否定（〜でない）である。この内部にあるおぞましいもの（アブジェ）としての母を捨てていく（アブジェクション）過程こそクリステヴァにおける主体形成のメカニズムである。つまり、主体はすでにつねに異質としての他者性（母）をかかえながら、それを否定し、更新していくものである。したがって、クリステヴァの新しい主体モデルは開放的、変革的、創造的主体であるということができ

る。

では、この主体はどのように西欧社会を変革しようと考えられているのか。クリステヴァは、まず西欧を歴史的時間に位置づけられた社会とみなす。歴史的時間とは、はじめと終わり、目的や企てなど、要するに直線的かつ均質に配置された時間である。そして、この時間を支える主体を「男の主体」とするのである。他方、女の主観性における時間には、

「男の時間」だけに支配されていない。「周期的時間」と「巨大な時間」が存在するとされる。すなわち、前者は月経周期や妊娠期間などの反復性・永遠性を本質とする時間であり、後者はすべてを飲みつくす神秘的な時間というより空間（太古のグレート・マザーをイメージとする、いわばカオス）としての時間である。

クリステヴァは、ボーヴォワールに代表されるフェミニズム第一世代は、女性が「男の時間」に自己同一化することによって平等を得ようとする運動

であったと考える。その意味で、第一世代のフェミニストは「父の娘」ということになる。しかし、「男の時間」に自己同一化できない「女の時間」を再生産の場において発見した女性たち（再生産にかかわる女の性的アイデンティティを問題とする）が登場する。これが一九六八年五月以降に出現した第二世代のフェミニストである。彼女たちは女性解放の戦略として「母性的なるもの」「女性的なるもの」を生きることを賞揚する。簡略化をおそれずにいえば、それは女の固有性の主張、男女の差異の強調である。

クリステヴァにとって男と女のいずれか一方の時間に傾くことは容認しない。それゆえ、彼女は先の二世代の弁証法的解決を想定することになるのである。（今のところその未来の解放図は描かれてはいない。）しかしながら、日本の女性解放の視点からみれば、今のところクリステヴァ理論の借用は困難といわざるをえないだろう。なぜなら、「男（父）

の時間」の否定として「女(母)の時間」を導入するには、日本的主体(なるものがあれば)は、彼女の主張するところの「くでない」という言語ならざる「母なる時間、空間」(沈黙や行間、気やムードなど)に支配されているようにみえるからである。

—ともあれ、フェミニズム第二世代の向こうに想定

誕生会の一年間

山口 陽子

この三月までの一年間は一歳児クラス十五名を担当していました。いちばん小さい二月生まれの子は

される第三世代が太古の母なる「巨大な時間」を特権化することなく、それと第一世代が同一化しようとした「直線的時間」の両者を引き受けることができるならば、新たな女だけでない男の解放の展望も開ける可能性はある。今後のクリステヴァの理論展開に注目したい。

(聖徳学園短期大学非常勤講師)



一歳一か月から二歳一か月までの一年間。四月生まれの大きい子は一歳十一か月から二歳十一か月の一